
 会員からの声

農家と試験研究と普及の雑感

小池 信明

函館地区農業改良普及センター

今農業をとりまく条件が大きく変化している。普及においても算盤からコンピュータの時代である。農業そのものも食料増産から有機・無農薬と変化している。畜産学会や草地研究会の世界も時代のニーズに応えるべく変わって来るものと思っていた矢先に、現場の声を聞いてくれるようになり、有難いことだと思っている。元々普及は研究機関ではないので学会や研究会に出席しても質問もしないし、しずらいものがあった。なぜなら細かい技術やその過程などはあまり必要としないし、生産者にも理解されずらいことが多いからである。特に普及の現場では家畜を使った現地確認試験は不可能であり、農家の方が経験も豊富で、新しい技術はなかなか入りづらいことがある。

更に飼料設計においても TDN・CP を合わせるのがやっとなりで、その他の細かい設計をしても農家現場では残食、盗食までの確認は難しいこともあり、大多数の農家では今のところそうした細かいところまで必要とするレベルに達していないと思う。

しかしながら農家にとっては、早急に新技術や牛舎の新築に取り掛かりたい場合もある。こうした農家の要望に応えるのも普及なら、時期を待たせて考えさせるのも普及だと思う。いずれにしても農家と十分に話し合い事を起こす、事を起こさせる技術こそ普及の技術であると、先輩上司に言われたことがあるし、単純な私は、今もってその教えを守りつつ仕事をしている。

しかし、事を起こす手段として手取り早く信頼関係を作るには、新しい技術や情報がどうしても必要になってくる。故に普及の技術は、必ずしもその技術を伝達するのが目的ではなく、事を起こす手段として利用する最大の武器ではある。特に最近では外国人講師による講演会が各地で盛んに開かれており、それが又人気がある。その結果、どうしてもそれらの技術に乗る人もいるし、話を聞いただけで自分の経営が良くなったと錯覚している人も出て来る始末である。資金力・労働力・経営能力の全てがそろっている農家なら新技術に挑戦することも良いのですが、一般的に能力のある人は2～3年の準備期間をつくり、それから取り組む方が、成功している例も多いと感じている。せっぱ詰まって準備考慮時間がなくて取り組んだ農家の中

には失敗した例もあり、それらの付け回しが、負債となっている事例が多いのも事実である。こういう状況下になった今、普及にとってもやや細かい技術まで理解する必要があると最近になって感じている。

試験研究機関に望むこと

これまで普及に関する一部を書いてみたが、現場に必要な技術情報として、関係機関に要望したいことは山ほどある。

1. 畜産農家全体に言えることであるが、景観作りと畜産公害が叫ばれている今、糞尿処理法に関するもので労働時間・経費更に土壌学的に総合的な判断資料が必要になってくると思う。経営学専門家の情報もほしいと願っている。
2. 高レベル農家層での話題であるが、民間中心で進められていたと思われる受精卵移植が今後どのように進んでいくのか？ 農家の庭先で簡単にできるのか？ ドナー牛としての経済効果はどうなのか、これらについての情報も必要になるとおもう。
3. 低レベル農家層で多い話題であるが、サルモネラ菌等による疾病情報や衛生的乳質改善対策等が現場では必要なものである。もっとも、乳質に関してはいくら研究が進んでも、技術が確立しても、実践するのは農家自身であるから普及側の実践させる技術も重要だと思う。
4. 今、函館地区において電子イオン水と EM 菌が話題になっている。これらの技術を頭から否定する気はないのだが、基本技術（削蹄・運動・牧草の適期刈り取り）が不十分な時でも効果があるのか、それらが乳質や飼料消化率にどの程度の影響を及ぼすのか、知りたい情報である。

最後に広い分野の学問があるけれども、家畜を通していくらの儲けになるか。その結果、農家はどの様に变化するか、の現場では、獣医さんも経営専門家も草地研究会も畜産学会も1つになった情報収集・発信組織はできないものかと常に考えている。そして、各研究機関の役割分担が、今よりスムーズになり、EM 菌などの研究結果があれば現場も仕事がし易くなると思われる。